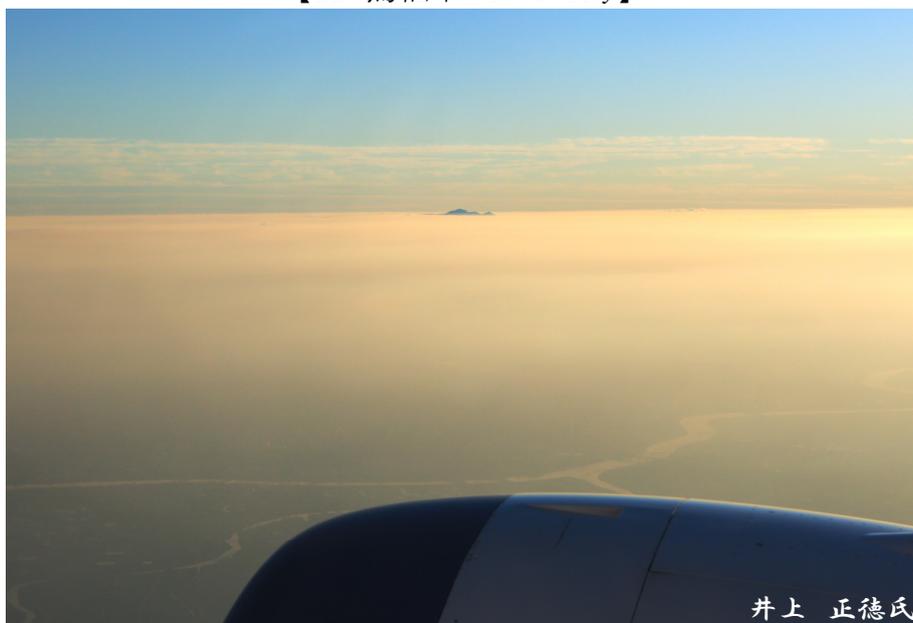


## 【11 鳥栖市 Tosu City】



鳥栖市上空の航空機内から(筑後川越しに)

鳥栖市では、市の中心部を東西に通る長崎街道や朝日山公園(JR 新鳥栖駅付近)、北部にそびえる城山(勝尾城跡)や九千部(くせんぶ)山などから、筑後川流れる佐賀平野・有明海越しに“北面の雲仙岳”が眺望できます。また、福岡空港に着陸前／離陸後の航空機が本市上空を旋回した場合には、上空から筑後川越しの雲仙岳が眺望できます(↑)。

脊振北山県立自然公園に指定された九千部山は、山頂からの展望が良好で、北には博多湾、南には雲仙岳が眺望できます。この山前は、平安時代に隣のみやき町一帯が風水害に悩まされた際、隆信沙門という僧が九千部山の山頂に登り、法華經一万部を読み上げて風神に祈願しようとしたところ、九千部以上読み終えたところで現れた女性に誘惑され、一万部に満たずに命を落としたという伝説に由来しますが、非常によく似た伝説が雲仙岳山中にもあります。雲仙岳の山岳宗教を開いた僧・行基が一万部のお経を読む修行をした際、美しい姫に姿を変えた赤岩観音の誘惑に負け、あと一部読めなくなったという伝説で、修行の場は九千部岳(↓)と名付けられています。九千部山の山頂からは、阿蘇山も眺望できる日があり、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることも可能です。

九州を旅した江戸後期の多才な知識人・頼山陽(漢学者、歴史・文学・美術など多方面で活躍)は、佐賀・長崎・天草と巡りながら雲仙岳を漢詩に歌いましたが、最初に詩を詠んだ場所は長崎街道の道中で、本市の田代の宿～轟木(とどろき)の宿(～みやき町の中原の宿)の辺りからと推定されています。山陽は、木々の間から眺められた雲仙岳を漢詩に詠んでいます。この辺りから朝日山の一角は、明治初期には“佐賀の乱”の激戦地となり、政府軍と佐賀軍が戦いましたが、その戦場で雲仙岳の主峰である普賢岳の風穴で一年中作られていた氷が販売されていたとの口伝記録が残っています。朝日山の山頂からも雲仙岳が眺められ、当時をしのぶことができます。

轟木川をはじめ、市内を流れる河川の水は南側の筑後川に合流し、やがて有明海に流れ込みますが、全国一の規模を誇る有明海の干潟の泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を筑後川や矢部川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、鳥栖市内を旅してみませんか？

●鳥栖市の観光情報はこちら ⇒ 鳥栖観光コンベンション協会 <http://www.tosu-kanko.jp/>



鳥栖市上空の航空機内から(拡大)



みやき町の筑後川沿いから